

研究種目：基盤研究 (A)

研究期間：2007-2010 ~

課題番号：19202006

研究課題名 (和文) 中世末期プロヴァンス祭壇画に関する美術史的知見の統合を促す科学解析の方法的研究

研究課題名 (英文) Researches on Physical Aspects of Artistic Objects & Cultural Properties for Methodological Integrations of Art History & Scientific Analysis

研究代表者

西野 嘉章 (NISHINO YOSHIAKI)

東京大学・総合研究博物館・教授

研究者番号：20172679

研究代表者の専門分野：美術史学

科研費の分科・細目：

キーワード：文化財科学・年代測定・物性研究・製作技法・美術史

1. 研究計画の概要

本研究は仏国プロヴァンスに残されている各種美術品・文化財について、可能な限りの理化学的解析法を適用し、作品の物性的側面に関する客観的な情報を抽出する方法を確立し、美術史学と保存・修復科学のなかに、かかる実証科学的なプロセスを定位させ、そこから得られる一次情報の解析結果を従来の意味論的な研究成果に帰一せしめ、人文学の全体的な「知」へと統合する手法を開発し、広く一般へ公開提示することを主目的とする。研究の主対象は、エクス＝アン＝プロヴァンスのサン＝ソヴール大聖堂にある『燃える柴の祭壇画』並びにサン＝マクシマンのドメニコ会バシリカ聖堂内礼拝堂にある、同時代の大型聖人像板絵4点である。本研究により下記の課題を実現する。

- 1) マイクロフォーカスX線CT装置、軟X線撮影装置、走査型電子顕微鏡、マイクロ蛍光X線分析装置、AMS装置、携行型蛍光X線分析装置、デジタルマイクロスコープ、クロモメーター、デジタル赤外線撮影装置、液体クロマトグラフ質量分析計など、各種の解析装置を使って作品の物性と技法について、可能な限りのデータを獲得し、それを修復の現場に還元する。
- 2) 上記データを、過去4年間に蓄積された14-15世紀作品関係物性・技法関連データと比較し、実証科学的解析の運用の安定化と精確

化・高度化を図る。

3) 従来の美術史学の方法論と実証科学から獲得される客観情報を複合化し、総合評価へと帰一せしめる方法を提起する。

4) 日仏共同国際集会を開催し、その議論を踏まえた総合報告書を日仏共同で公刊する。

5) これまで外国研究機関に依存してきた分析データを、総合研究博物館データベースとして蓄積公開し、美術品・文化財等の実証科学的解析ネットワークの中核的研究機関としての機能を具現化する。

6) 文化財修復と文化財科学、仏国政府機関と日本国研究機関が、相互に依存連携しつつ、1個の文化事業を遂行するという国際連携文化事業モデルを広く社会に向かって例証してみせる。

2. 研究の進捗状況

本研究は、科学研究費基盤(A) (一般)「美術品・文化財等の科学解析による美術史学の精確化と包括的帰一に関する研究」による2003-2006年の日仏共同研究を発展的に継承するもので、共同研究のフランス側パートナーとなった仏国文化コミュニケーション省のプロヴァンス・アルプ・コートダジュール地域圏文化事業局との話し合いのなかで、2007年より、研究の対象を、すでに修復事業の開始されていたニコラ・フロマン作『燃える柴の三連祭壇画』(エクス、サン＝ソヴ

ル大聖堂)並びに、第一次調査のさい、その学術的・歴史的価値が高いと認定され、なおかつ修復等の保存措置がいまだ未着手の状況にあった四点組板絵『四聖人像』(サン=マクシマン、聖堂)の二点に絞り、さらに詳しい科学分析を行うことになり、これまで三年間に亘り研究計画に掲げた各種の方法による調査を続けてきた。前者については、本研究グループが取得した物性に関する基礎データが、祭壇画の修復事業に生かされ、2010年7月1日、7年に亘る修復事業が終わり晴れて大聖堂内サン=ピエール礼拝堂で落成記念式典を迎えることになっている。また、後者については、学術的に必要とされる基礎データの取得はすべて終わっているが、調節的な管理者であるサン=マクシマン市の地元信者たちに対する配慮もあり、支持体の仮補修は行うことができたが、本格的な洗浄修復をするまでには至っていない。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)当初予定していた、各種の科学分析については、ほぼすべてデータを取得することができた。と同時に、その過程で、これまでに知られずにあった、多くの知見を得ることができたから。また、それらを統合的に評価し、中世後期の「祭壇画」が美術史的な意味での図像プログラムとしてだけでなく、存在論的な意味での物質構造体として、どのような材料で、どのような技法で製作されていたのかを、かなりの程度まで細かく把握することができたから。その点で、図像学(イメージ)、解釈学(シンボル)、歴史学(史料学)に偏重しがちであった、これまでの美術史学に新たな論点を提起し得る地歩を得ることができたと考えられる。

4. 今後の研究の推進方策

同じ画家の作品とされる『聖ラザロの蘇生の三連祭壇画』(フィレンツェ、ウフィッツィ美術館)についても調査を済ませており、絵画技法上の比較検討を行いたい。また、フランス側共同研究者が『マトロンの携行二連祭壇画』について調査を行っていることから、それとの比較も行いたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

—西野嘉章、特別講演会「美術史と文化財科学」、日仏美術学会、日仏会館、2007年12月6日。

—西野嘉章、「第4回調査報告」、三連祭壇画修復委員会、エクス=アン=プロヴァンス、2007年6月5日。

〔図書〕(計3件)

西野嘉章、クリスティアン・ボラック、維新とフランス 一日仏学術交流の黎明一、東京大学総合研究博物館、378頁(2009)

Y. Nishino + Ch. Polak, *Ishin: L'aube des échanges scientifiques entre la France et le Japon*, Musée de la Recherche de l'Université de Tokyo, 28 mars 2009 (共編著)。

西野嘉章 + 吉田邦夫 + 丑野毅、『美術品・文化財の科学解析による美術史学の精確化と包括的帰一に関する研究』、東京大学総合研究博物館、2007年3月。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕